

# イギリスにおける学校と地域との連携

清 國 祐 二

## はじめに

2012年10月に国立行政法人教員研修センターが主催する「教育課題研修指導者海外派遣プログラム」にシニアアドバイザーとして参加する機会を得た。教育課題には「学校と地域等の連携」が設定されており、訪問先はイギリスであった。イギリスは筆者の研究対象国であったこと、1999-2000年にかけてランカスター大学客員研究員として滞在した国でもあり、イギリス社会や学校、子どもの遊び支援等について有益な情報をもっていたことなどから選任された。学校教育やその制度についてはさほど詳しくはなかったが、ランカスター大学時代の教職員に相談しながら、訪問先の選定等に関してアドバイスをを行った。

訪問先は表1の通りである。教育行政や初等中等学校、特別支援学校、継続教育カレッジ、冒険遊び場協会等、多様な学校や機関を訪問することができた。特に、地域との連携に関する収穫としては、理事会や校長の権限が大きく、その理事会と校長が地域とのパイプ役を果たすとともに、受け入れ等の責任を負うことになっていることであった。今回は訪問した学校の中から4校を取り上げて解説する。

表1：訪問先一覧

訪問日	滞在地	訪問先
10月10日（水）	Manchester	Salford TEN Centre（教育行政機関）
10月11日（木）	Lancaster	Ellel St. John's Church of England Primary School（初等学校）
		Beaumont College of Further Education（特別支援カレッジ）
10月12日（金）	Manchester	Manchester Communication Academy（中等学校）
		E-ACT Blackley Academy（初等学校）
10月15日（月）	London	London Play（冒険遊び場協会）
		Glamis Adventure Playground（冒険遊び場）
10月16日（火）	London	Haverstock School（中等学校）
		Whitchurch First School and Nursery（初等学校）
10月17日（水）	London	Barnet and Southgate College（継続教育カレッジ）
		Oakleigh School（特別支援初等学校）
10月18日（木）	London	Hampton Hill Junior School（初等学校）

## 1 イギリス訪問に際して

イギリス訪問の前に、事前研修としてイギリスの社会と教育について講義を行った。特に、イギリスの社会や歴史、文化を知ることが、訪問のモチベーションを高めるために重要であると思い、日常生活に絡めた内容とした。以下、講義の内容に沿って要約する。

### （1）イギリスの教育制度

イギリスはイングランド、ウェールズ、スコットランド、北アイルランドの4つの国からなる連合王国

である。図1に示されたイギリスの学校系統図は、人口規模の大きなイングランドとウェールズの制度が掲載されている。M.サッチャーが首相に就任した1979年以降、イギリスは小さな政府を目指し、国有企業を民営化するなど大胆な改革を行った。1988年の教育法改正により、教育においては中央集権化を図り、ナショナルカリキュラムや全国共通テストが実施できる体制をつくった。その後、幾度か政権交代が起こったが、教育改革は多少の見直しはありながら、継続的に実施されている。一方で、パブリックスクール（私立学校）は就学人口の約7%を維持しつつ、独自のエリート教育が行われている。

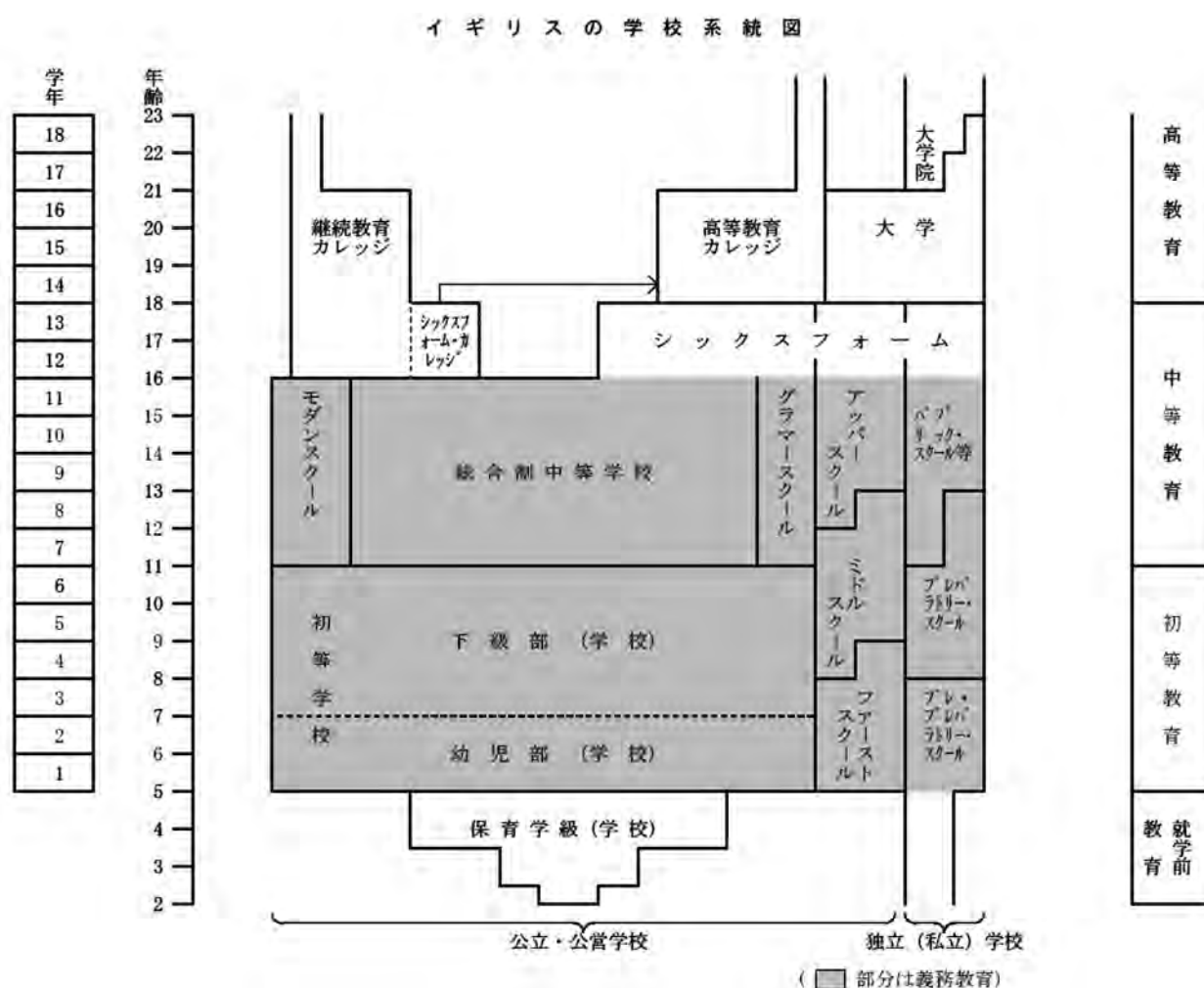


図1：文部科学省『教育指標の国際比較』（平成24年度版）

## (2) イギリスの社会

イギリスの教育を考える上で、イギリスの歴史や社会をある程度把握しておく必要がある。イギリスは質素な国であることは案外知られていない。地震被害のない国でありため歴史的建造物が多く、一般の住宅も石や煉瓦造りであり、100年を越えるものも珍しくない。調度品も古いものを大事に使い、リサイクルに対しても抵抗感なく定着している。オックスファム (Oxfam) というチャリティショップは、無償で提供されたりサイクル品を有料で販売して、その収益金を開発途上国の支援に充てるなど、社会貢献意識も高い。

イギリスの代表的な食事といえばフィッシュ アンド チップスであるが、そこから食にはあまりこだわらない国民性がうかがえる。スーパーマーケットには大量の冷凍食品が陳列され、週末にはホームセン

ターで見かけられるような大型のかご台車いっぱいに食品を買い込んでいく光景が見られる。普段はそのような手のかからない料理を中心に行っているようである。もしも、おいしい食事をしたければ、中華やイタリアン、インド料理、タイ料理、日本料理等、世界中の料理を味わえばよいという考え方である。

医療制度にも特色がある。病院はほとんど公立であり、登録している地域病院であれば無料で診察や治療が行われる。とはいっても、病院で診てもらうには予約が必要でよほどの急患でない限り、およそ一週間後の診察となる。つまり、風邪ぐらいでは病院にかかれぬ仕組みになっていて、そのためか薬局はたくさんある。国家予算における医療費を抑制するための措置であり、一面的に見るとひとつの有効な方法であるといえる。

その他にも、日本の常識とはかけ離れた不思議なことがたくさんある。イギリスに対する興味関心を膨らませることで、教育の考え方や仕組みの違いがどこから生み出されているのか、深い理解につながるであろう。

### (3) イギリスの学校紹介

筆者が2000年に客員研究員としてランカスター大学で研究に従事していた頃、子どもが通っていた学校（エレル小学校）について紹介する。ランカスターはイングランド北西部に位置する風光明媚な小都市である。エレル小学校は、市の中心部からは外れた牧歌的な地域に所在している。日本の小学校と対比しつつ、特徴的なところについて述べる。

イギリスでは性犯罪が深刻な社会問題であり、子どもがその犠牲にならないよう安全には細心の注意が払われている。小学校までは登下校に親の送迎が義務づけられており、子どもの安全は親が守ることを原則としている。通学路には防犯カメラがいくつも設置されており、一種の抑止力となっている。交通事故を予防するために、通学時間帯には横断歩道を中心に交通指導員が立っており、安全の確保に努めている。



写真1：一斉授業の様子



写真2：アシスタントによる指導

学校は9：00に始まり、15：00で放課となる。教室に入るとまず朝の会が始まり、先生が伝達すべき事項を子どもたちに告げる。授業は午前中に基礎科目が充てられるのが一般的であり、その後応用科目や実技科目が行われる。一斉授業は限られた時間であり、大半はグループごとに課題に取り組むことが多い。グループは習熟度別に編成されており、特に基礎科目ではグループのレベルに応じた課題が準備されている。また、複数学年が同一の教室で学んでいることは、私たち日本人には想像しがたいところである。

上記のようなクラスと授業方法となっているため、教師がひとりでは十分な学習指導ができない。そこ



でティーチングアシスタントが必要となり、クラスごとに置かれている。障がい児がクラスにいる場合は特別支援のアシスタントもついている。アシスタントには授業全般への責任は発生せず、あくまでも担任教師の補助としてその役割を果たしている。その他、英語を母国語としない外国人に対しては英語指導のスタッフが行政から派遣され、イギリスの子どもが英語（国語）を学んでいる間に特別授業が行われている。そのようなきめ細やかな対応もなされている。

基礎科目と実技科目以外は調べ学習やグループワークを実施することが多い。3年生（日本の1あるいは2年生に該当）で「モーゼの十戒」に順位づけをさせて、それをもとに討議させるなど、早い年齢段階から自分の考えをまとめて相手に伝えるトレーニングが組み込まれている。担任の説明によると、社会に出て生きる力は単純な知識量ではなく、コミュニケーション能力であるから、早く慣れさせるためにグループワークを取り入れているということであった。

学校の多くは、イギリス国教会との関係が深く、それぞれに地元の教会と結びついて、宗教教育や宗教行事を行っている。しかし、子どもや親の信教の自由は保障されてるため、決して無理強いされることはない。希望する子どものみがそれらに参加すればよいのである。道徳性や寄付の精神などは宗教教育とともに伸ばされているように感じた。

ここで少し平等観について触れておきたい。上述の通り、クラスには複数学年の子どもが在籍している。実技科目等で学年ごとに授業を行う場合もあるが、基礎科目については混合授業の形態をとっている。日本であれば、親が人権侵害として訴訟にもちこんでもおかしくない。当時校長であったのホワイト先生は「子どもは学校に勉強に来ている。子どもがわかるところで授業を受けるのが理にかなっている。」という趣旨のことを話してくれた。そもそも平等観が日本とはかなり異なることを強く印象づけられた出来事であった。これはイギリスを理解する上でひとつの重要な鍵でもあることは明らかであった。他にも紹介したい価値観の相違はあるが、紙幅の都合でこれくらいに留めておきたい。

授業以外では、親の仕事の関係で朝十分な時間がとれない場合の有料の朝食サービスも提供されている。放課後は日本と同様キッズクラブがあり、17:00まで学校で過ごすことができる。これは学校の管理下ではなく、専属の有給スタッフがいて、遊びを中心とした活動を提供している。高学年になれば、地域のスポーツクラブに通う子どもがいたり、音楽などの習いごとをする子どももいる。学習塾は知る範囲では存在しなかった。



写真3：朝食サービス（有料）

#### （4）イギリスにおける子どもの地域活動

イギリスでは子どもの地域活動に古くから関心が寄せられていた。20世紀初頭にはすでにボーイスカウトが組織されていたり、第二次世界大戦終結の年に冒険遊び場が誕生したり、1960年代にユースサービスが制度化されたり、さまざまな取組が民間セクターでも公共セクターでも発生した。現在も青少年施設や団体が主催するサマーキャンプなどのプログラムは数多く開催されている。

その中でも、ロンドンの冒険遊び場を題材に子どもと地域について概観する。ロンドンの冒険遊び場（プレイグラウンド）のネットワークの要に位置する組織はロンドンプレイである。ただ、ロンドンプレイ

イがロンドン市内のプレイグラウンドの運営をしているのではなく、プレイグラウンドがそれぞれに活動のための財源を確保し、地域の実情に応じた運営をしている。行政が運営しているところもあれば、企業の寄付によって成り立っているところもある。いずれも、子どもの放課後の居場所であったり、子どもが集団で遊んだり、チャレンジングな活動ができたりと、子どもの遊ぶ権利を保障する活動でもある。

その中のひとつを紹介することで、子どもと遊びについて問題意識を共有したい。ロラード ストリート アドベンチャー プレイグラウンド (Lollard Street Adventure Playground) である。ここは黒人が多く居住する地域で、ロンドンの中では貧しい地域である。ランベス教育委員会が予算を出して運営している。活動時間は、長期休業中が10:00~18:00、学期中が15:30~20:00、土曜日が11:00~16:00、日曜日は休みとなっている。かなりの時間、子どもがここで過ごしていることがわかる。



写真4：プレイグラウンド看板

ロンドンの冒険遊び場に共通する特徴は、周囲に柵が張り巡らされていることである。これは学校の登下校と同じく、子どもが犯罪の標的とされないようにするためである。次に、木材等を使った手作りのシンボリックな遊具が見られることである。この製作にはプレーリーダーはもとより、子どもや保護者、地域の人が協力しているという。遊具には安全性が求められるため、設計の段階で行政のチェックは受けなければならない。



写真5：プレイグラウンドの外観

遊び場にはさまざまな問題を抱えた子どもが来ている。近年、ネグレクトにより食事を与えられない子どもや発達障がいのある子どもが増えているという。そのための食事であったり、集団遊びの支援をするボランティアであったり、多様なケアが行われている。教育委員会による運営の場合は学校との連携も行っているようである。いずれにしても、学校と同様に地域においても子どもの発達支援に熱心に取り組んでいる様子がうかがえる。

#### (5) まとめ

イギリスの青少年問題とその取組は、日本の近未来を映す鏡でもある。若年失業、ニート、薬物使用等の問題、どれもイギリスは先に経験している。もっとも、日本がそこから学ぶべきことは、対症療法的な事後対応ではなく、そのような事態に至らぬように予防することである。イギリスの事例から学ぶことで、「今、私たちにどのような取組ができるのか」を考え、実践する必要がある。家庭の教育力を取り戻すことは重要であるが、私教育の領域に踏み込むことの困難が予想される。そうであれば、家庭の支援もしつつ、学校と地域社会とがともに手を携えて、子どもの成長発達に責任をもつことが重要である。多くのことをこのイギリス研修から学んでいきたい。

## 2 イギリス訪問のインパクト

### (1) 大胆な教育改革とアカデミー

今回の訪問で最もインパクトが大きかった学校はマンチェスター コミュニケーション アカデミーであったらう。滞在するホテルからアカデミーまでバスで移動する途中、公営らしき5～6階建ての集合住宅が目に入った。1階2階あたりの窓ガラスが割れていた、それを覆うように板が張られているのを見て、少し不安が横切った。しかし、到着したアカデミーは真新しい建物で、太陽の光を浴びてまぶしいくらいであった。エントランスも立派で、さすが産業革命期に世界を牽引した工業都市マンチェスターの学校だと感嘆した。それもつかの間、その感嘆はすぐに別の意味での驚きに変わった。

このアカデミーはマンチェスターでも最貧に位置づけられる地に建設された中等学校であった。常識では考えられないほど高い失業率と多数のエスニックマイノリティが居住する地域であり、治安の面でも不安な街であるようだ。次代を担う若者を育てる教育は、社会や時代と切っても切り離せないため、常に多種多様な課題をとまなっている。この地域であれば「貧困の再生産」や「経済的格差の拡大」が最も大きな課題となっている。だからこそ国策として積極的是正措置を必要とした地域だったのである。

教育を理念として語ると、人は法の下に平等であり、教育は誰であろうと等しく享受でき、生まれもった家柄や財産とは関係なく、学びの成果に応じて適正な評価がなされるはずである。しかしながら現実には家庭環境によりその教育の質は大きく左右されることは誰しも経験的に知っている。さて、この課題をどのように克服しようとしているのだろうか。

誤解を恐れず表現すれば、「貧困の連鎖を断ち切るためには家庭や地域から生徒を引き離すことが最も有効である」との判断である。一日の一定時間、現実の世界から切り離し、正義や公正、平等などの近代社会の価値に守られた場所で過ごさせるのである。そのために、学校内では平等が保たれなければならない、教材教具はもとより制服から靴まで一切合切に対して国の財源が充てられるのである。また家庭で食事が与えられない状況の生徒に対しては無料の朝食サービスを施したり、給食は生徒全員に無償で提供したり、課外のクラブ活動も同様になっており、現実の格差を覆い隠している。徹底した実験学校であるといつてよいだろう。



写真6：学校の外観



写真7：休憩時間の中庭



写真8：「ドラマ」の授業



上では「家庭や地域から生徒を引き離す」とストレートに書いたが、実際には保護者を含む地域の成人や外国人に対して識字教育を行ったり、生徒が使用しない時間帯には地域の人にも使ってもらったり、信頼関係の構築に取り組んでいるところでもある。コミュニティスクールのひとつの特徴は、学校の用途が在学する生徒に限定されるのではなく、広く地域社会に開かれていることでもある。

最後に、学校への企業の支援体制が素晴らしい。このアカデミーのメインスポンサーはBT (British Telecom) であり、教育効果を高める備品の提供を行ったり、最先端技術者等による授業を実施したり、物心両面において大きな役割を果たしている。もちろん、企業からの代表者が理事会に加わり、学校の経営理念や教育理念、運営方針、授業評価等に対してチェック機能を働かせてもいる。アカデミーはそれを象徴するような存在である。



写真9：「美術」の授業

## (2) 地域との連携協力と学校運営

PFI (Private Finance Initiative) 方式で校舎を建設し、文字通り地域の学校となっている、ロンドンにあるハバーストック スクールも注目に値する。また日本人にとっては、鹿島建設が学校建築を担当し、施設運営に大きな役割を果たしていることにも誇らしさを感じてしまう。さて、PFI方式とは民間資金を行政運営の部門に積極的に取り入れようというものである。類似する言葉に、NPM (New Public Management) やPPP (Public-Private Partnership) などがあり、どれも行政のリスク分散と民間ノウハウの活用を狙っているようである。



写真10：学校の外観

鹿島建設と行政当局は、具体的にどのような契約を結んでいるのであろうか。校舎は建設した鹿島建設の所有であり、ウィークデイは行政が有料で借り受けて中等学校として運営している。建設ローンと基本的には同じ仕組みであるから、賃料を払い続けることで25年後に行政に譲渡されることになっている。夜間や休日は鹿島建設の子会社が運営し、収益事業としての成人講座を開催したり、貸し館にしたり、効果的に活用するよう工夫している。行政のみで学校を設置すれば、その建物の使用目的が限定的になり、どんなに素晴らしい設備があっても夜間や休日は休ませるしかない。そう考えると、PFI方式で学校を整備すれば民間の発想が施設運営にも生かされて、面白い取組が誕生するかも知れない。

さて、上述のようなことが実現するには、いくつかの条件が揃わなければならないのであろうが、そのひとつである理事会の存在に注目してみた。私立学校の理事会とは異なり、公立学校の理事会にはそれぞれに共通点があるよう



写真11：オープンスクールの日程表

に思えた。理事には学校と保護者のみならず、地域住民、地元企業、その他関係者がまんべんなく入って、学校運営に発言していくのである。その発言が生かされるためには財源が必要となるが、イギリスの学校の多くは行政からの交付金だけでまかない切れず、企業や団体、個人による寄付等でカバーしている。例えば、指導力が高く授業が上手な先生に、学校独自の給料上乗せ分を提示してヘッドハンティングすることも現実に行われている。施設設備の充実に活用したり、特定の教科の充実を図るための使い方をしてもかまわない。しかしながら、決定したことには理事としての責任をとらなければならない。場合によっては辞職やむなしであり、このバランスが理事の役割を相対的に高めているように思える。

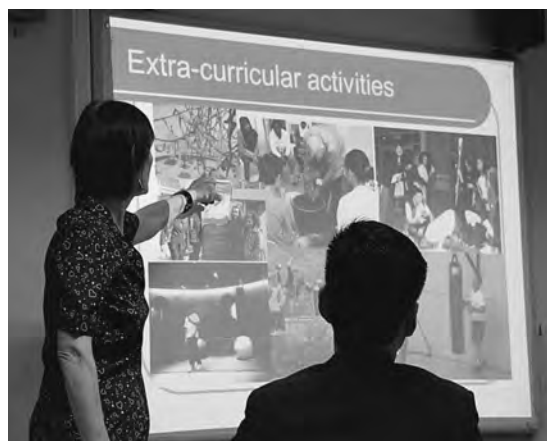


写真12：地域と連携した課外活動

### (3) 校長のリーダーシップとファンドレイジング

ハンプトン ヒル ジュニア スクール校長は在職25年になる、とても有能な管理職である。児童の個性を最大限に伸ばすために、さまざまな仕掛けや特別なケアが行われていた。第一に考えられていたのは、子どもを中心とした指導である。教室で実施されていた授業はイギリスでごく一般的なスタイルであり、比較的短時間で行われる一斉授業とその後に行われるグループ別授業である。アシスタントティーチャーを含む2人ないし3人の先生が教室におり、グループを回り、学習の進捗を確認しつつ、適宜指導する方法をとっていた。



写真13：学校のエントランス



写真14：グループ別指導

さらに、教室外の通路には長机が置かれており、保護者や地域住民のボランティアによる補充学習が個別に行われていた。ボランティアは教頭等が面接をするなど人柄等に触れて確認を得てから、校長が許可する形式をとっているようだ。補充学習だけでなく、芸術活動等の専門的指導も校内で行われていた。私たちが訪問しているときにはランペットの先生が学校を訪れており、順番に児童の指導にあたっていた。前者は無料であるが、後者は習い事と同じであるため有料となっている。ただし、どちらも児童の所属する教室内では授業が行われている時間であったことには違和感を覚えたが、ひとまず現状を受け止めることにした。





写真15：ボランティアによる補充学習



写真16：芸術活動の個人レッスン

発達障がいはいは今や学校内での理解がかなり浸透してきたといってよい。この学校でも、集中力や注意力に欠ける児童を特別教室に集めて非常勤の先生が上手に教えていた。これ以外にも、児童会委員や環境大使等の役割を効果的に与え、学校外の地域住民とふれ合える場面を設けている。放課後の課外活動も地域の協力を得て、20程度の多彩な活動がラインアップされている。地道な教育実践の他に、このような児童一人一人を生かす教育も高く評価されて、Ofstedから優秀校の称号が与えられた。



写真17：発達障がい児との授業



写真18：クラブ活動の種類

さて、ファンドレイジングとは外部資金の確保を意味する。ごく普通の集め方は、保護者のバザー収益金であるが、これだけの金額では到底足りない。保護者や地域住民に呼びかけて寄付を募ってもいるが、それほど集まるわけでもない。そこでこの校長は、スポーツのプロ選手から関連グッズを無料で譲り受け、ネットオークションにかけてその収益を学校に寄贈している。この豊かな発想と実行力があってこそ、待機児童が300人を超える人気のある学校として確固たる地位を築いたのだろう。



写真19：学校案内をしてくれた児童会委員

### 3 イギリス訪問から何を学ぶのか

#### (1) 社会を生き抜く力

2010年および2011年世界の大学ランキング（クアカアレリ・シモンズ社が毎年発表）のトップはイギリスのケンブリッジ大学となっているが、2009年度版PISA学力到達度国際比較ランキングにおいてイギリスは読解力25位（65カ国）、数学27位（35カ国）、科学16位（35カ国）と奮わない。これらはひとつの指標でしかないが、さりとて何かを読み取ることは可能であろう。世界のトップクラスに君臨しているケンブリッジ大学やオックスフォード大学への進学は、パブリックスクール（私立学校）の生徒が多くを占めていることはよく知られている。小さい頃からエリート教育を受けてきた子どもが一流大学に進学して、高い評価を得るのは不思議なことではない。しかしながら、そこには非エリートの歪みもあるはずだ。

1979年に始まるサッチャー政権以降続いている教育改革は止むことはない。1988年の教育法改正により教育の中央集権化が強まり、共通テストの導入で競争原理が取り入れられた。校長や理事会の権限が増す一方で、結果に対する責任も重くなってきている。イギリスという社会の内包する問題が解決されないまま、学校だけ改革しても不十分なことは自明のことである。大いなるジレンマを抱えながら、それでも改革の手を緩めることはできない。さて、今回の訪問でどの学校も力を入れているように映った科目がある。それは「ドラマ」だ。演劇というよりは、コミュニケーション能力を高める科目と理解した方がしっくりくる。中等学校の生徒にとって、社会に出て役立つ技能とは仲間と協調して仕事に取り組めることである。良好な人間関係を築くことで、直面するいくつもの困難に対処できるのである。いわゆる5教科を軽視するわけではないが、社会を生き抜く力をバランスよく習得させる意気込みを感じることができた。

#### (2) 学校の説明責任

イギリスの青少年問題への対応は義務徴兵制が終わる1960年代から本格化する。最初は義務教育後の余暇活動、続いて失業問題や職業訓練が中心であった。それから徐々に差別やいじめの問題、ニートや引きこもりの問題、犯罪や薬物の問題へと深刻化していく。これはどの先進国にも共通に見られる問題である。これらの問題は学校だけで到底解決できるものではない。家庭との連携はいうまでもなく、警察や保護施設等の専門機関との連携、児童相談所や病院等の相談機関との連携、職業安定所や企業との連携など多面的な取組が必要となる。

まずはいじめの問題について取り上げる。エレル小学校では「反いじめ方針」を示して、学校がどのような考え方で、どのような防止策を講じ、いじめ行為にどう対応するかなどこと細かく定めている。特に重要なのは、親がこの方針に同意し、原則としてこれに従うことが求められている点である。もし不服があって、両方で合意に到達できないようであれば、親の考え方と一致する学校に入学（転校）するようながすことができる。このような学校の毅然とした態度は日本の学校としても参考にできることではなかろうか。

次に、アシスタントティーチャーやボランティアについてである。最終的な判断は校長が行うが、その手続きが済めば外部の人材が学校に入ることが可能となる。ただし、大切な子どもを預かっている学校であるので、守秘義務は必須要件となる。それについても、「職員心得」（ボランティアを含む）が示されており、契約が交わされることになる。事前にしっかりと取り決めをしておくことが重要である。

歴史や文化、思想は長い年月をかけて築かれたものである。その上に制度がつくられているため、他国のものを導入しても必ずしもうまくいかない。私たち日本人が外国から学ぶときは、背景も含めて総合的な見地から理解する必要性を感じた。

## マンチェスターコミュニケーションアカデミーでの学習と教育

本校の学習環境はフレキシブルな学習エリアと専門教室で構成されており、この構成のおかげで、創造的、革新的な仕方での学習を編成することができている。当校は以下の理由で「従来の」学習環境とそれに伴う教育・学習方法には問題があると考えている。

- ・従来の教室では、教師中心の学習環境になりがちである。
- ・従来の教室は今日の学習スタイルや職場に合っていない。
- ・従来の教室では、柔軟で創造的な ICT の使用が制限されかねない。
- ・一クラスに教師一人という従来のモデルでは、個々の教師のスキル、科目の知識、能力により学習の幅が制限される。

我々は以下の理由で、フレキシブルな学習環境が学習に最も適していると考えている。

- ・学習者中心の学習環境であり、教師は指導者および学習促進者として大いに活動し、建設的な学習理論をサポートする。
- ・包括的な学習環境である。
- ・必要な場合には高レベルのサポートが与えられる。
- ・ICT が効果的に使用され、「教師」は情報の唯一の提供者とはみなされない。
- ・学習環境は柔軟なものであり、種々の形をとり、様々な関連する学習機会を提供する。
- ・生徒は自分のペースで学習でき、容易にペースを加速させることができ、無理なくグループ学習に移行することもできる。
- ・生徒は独自に学習してスキルを適用することを学ぶ。
- ・その学習環境では、学習者はアカデミーの価値観を實踐して礼儀正しい学習コミュニティを形成するよう促される。
- ・職員数の比率が高いため、生徒の積極的な行状が促進される。
- ・教育の共有により、望ましい習慣が広がりやすい。
- ・チームとしての教員プランや知識、スキルが蓄積される。

5 分野でカリキュラムが施され、数名の職員により最大 120 名までの学習者が各授業を受けられる。学習編成の詳細は以下のとおり。

分野	学習環境構成
英語と数学	各専門分野ではフレキシブル学習を採用。
科学技術	この分野では実用科学技術用の小型教室でのフレキシブル学習を採用。
国際理解	この分野では言語学習用の小型教室でのフレキシブル学習を採用。
創造性と美術	この分野では演技、音楽、芸術、画像用の専門教室でのフレキシブル学習を採用。
健康と福祉	現在この分野では、体育と調理のための特別教室が使用されている。「人らしく生きる」カリキュラムではフレキシブル学習を採用。

この学習環境のおかげで、教育と学習の変革をサポートする革新的、創造的習慣を確立することができている。職員はカリキュラムを実施し順調に進むようチームとして働き、予定表に合わせて計画を立てることにより学習経験を常に改善するために反省と決定を繰り返すことができている。学習者は個々に学習し、学習と進捗状況を自分で調整することが期待されている。学習はしばしば実地的なトピックや質問を中心に行われ、それにより機能的な学習が可能になる。個人指導、ディスカバリー室、ポッドキャスト、リアルスマート、ヘルプデスクなどを通して技術や知識を確実に習得できるようにし、応用およびその後の評価により理解や進捗度が証明される。

## 責任

各科目に関し、職員は、生徒たちや彼らの進捗状況について責任を負う。職員はまた進捗状況を報告し、能力に応じて課題を与え、進捗状況を加速させる責任を負う。分野リーダーはその分野について様々なサポートを与え、生徒に課題を与える責任を負う。各生徒はアカデミーの一員であり、進捗グループの一員でもある。アカデミー全体の学習者の進捗状況を監視するのは進捗リーダーの責任である。

生徒の進捗データはエジュトラック (Edutrack) システムに記録され、品質保証プロセスを通してアカデミー全体のデータの妥当性を確認する。データは毎日分析してスコアカードに記載し、科目介入の影響を記録、監視する。

当校の学習環境と職員の配置の性質ゆえに学習と授業はほぼ毎日チェックする。公式な授業モニタリングは学期ごとに実施する。



## ハバーストック オフステッド 2011

ハバーストックは、生徒の学力が速く上昇し、順調に成長する優れた学校である。同校には、カリキュラムや質の高いケア、指導、サポートといった多くの際立った特徴がある。

現在、授業の質は高く、授業の比重が際立って増加している。

教師や他の職員は個々の生徒のことをよく知っており、その際立ったケア、指導、サポートは、生徒の安心感、喜び、達成度に大きく貢献している。

生徒の芸術面、運動面、文化面、精神面での発達は際立っている。

校長やシニア指導チームは情熱的で、確固としており、効果的な指導ができている。彼らの学校に対するビジョンを職員、生徒、地域社会、理事会が共有しており、それにより非常に効果的に学校の指導者をサポートし、課題を与える ことができている。

学校の成功は父兄その他広範囲の結び付きを持つことにより高められ、より豊かになっている。それにより生徒たちは大いに恩恵を受けている。

生徒たちは学校を楽しんでおり、大きな安心感を抱いている。サイバーいじめなどのいじめ事件の発生率は非常に低く、いじめは適切かつ迅速に扱われている。

カリキュラムは幅広く、バランスが取れており、生徒の多様かつ複雑な必要を満たすため注意深く計画されている。

生徒たちが参加できる様々な課外活動があり、その参加率が高い。

優れたケア、指導、サポートがなされており、生徒が学校のシステムを非常に信頼していることは生徒からのフィードバックからも確認できる。

新入生が早く学校に慣れるよう助けたり、次の教育段階に備えたり、将来の就職のための訓練を施したりする点で、当校の移行制度は非常に効果的である。

当校は、提携小学校、学区の警察官、および地元自治体の支援サービスとの優れた結び付き、並びに事業や専門職などを通じた地域社会との広範囲に及ぶ結び付きや接触を持っている。

## ハンプトンヒル小学校共同体結合促進方針

2006 年教育および監査法によれば、学校には共同体の結合を促進する義務がある。

### 1. 序論

当校のカリキュラムは、生徒や社会の霊的、道徳的、文化的、精神的身体的発育を促進し、卒業後の機会、責任、経験に生徒を備えさせるものでなければならない。

我々はすでに学校としての役割のこの部分を考慮し、共同体の結合を促進するよう努力している。移民や経済変動により地域社会がますます多様化しているため、すべての学校が共同体の結合を促進する点でその役割を十分に果たすことがこれまでになく重要になってきている。当校は繁栄し、団結した共同体であるべきだが、より団結した社会を築く点での重要な役割も果たしている。各学校は文化、信仰、民族、社会的背景の点で多様なこの国で生活し、働くことになる児童や若者を教育する責任を担っている。幾つかの学校の職員や生徒の人数構成はこの多様性を反映しており、異なる背景の生徒同士と一緒に学習している。

我々は、学校がその方針やカリキュラムを通して、共通の一体感を促進し、多様性をサポートできることを示し、生徒に対して、共通の経験や価値観を持つことにより異なる共同体がいかに団結できるかを示したいと願っている。

我々は、「いかに仲良く暮らすか」、「違いに対処する」といった問題について、時には非常に議論を呼んだり困難だったとしても、これらの問題に取り組むことがすべての学校の義務であると確信している。

### 2. 共同体の結合とは何か？

我々にとって共同体の結合とは、すべての共同体による共通のビジョンや帰属意識が存在する社会、人々の背景や境遇の多様性を理解し評価する社会、すべての人々に同様の人生の機会が与えられる社会、並びに職場や学校やより広い共同体において強固で積極的な関係が存在し、継続的に成長する社会を目指して努力することを意味する。

#### 学校の観点から見た共同体

学校にとって、「共同体」という用語は以下のような様々な側面がある。

- ✕ 学校共同体—学校の生徒、その家族、学校職員
- ✕ 学校の地元共同体—地理的校区およびその地域に住むもしくはそこで働く人々
- ✕ 英国共同体—すべての学校はこの共同体の一部と定義される
- ✕ 国際社会—欧州共同体および国際関係

さらに、グループ内の学校によるネットワークなど、学校そのものが共同体を築く場合もある。

### 3. 共同体の結合を促進するために何ができるか？

#### 3.1 当校は共同体の結合にどのように貢献するか？

すべての学校は、生徒の構成に関わらず、生徒が多様な背景を持つ人々と共に生活し繁栄するよう助ける責任を負っている。

多様な生徒で成る幾つかの学校では、様々な民族的、社会経済的背景を持つ生徒が共に学び、互いから学び、互いについて学ぶよう助けるための既存の活動および努力がすでに共同体の結合に貢献していることになる。生徒の構成があまり多様でないか主の一つの信仰、社会経済的または民族グループの生徒で成る他の学校では、様々な背景を持つ生徒間での交流の機会を提供する必要がより一層大きい。

我々は、当校の努力の様々な側面がすでにどのような形で融合や共同体の結合を促進しているかを見極め、

これをもとにカリキュラム行動計画を見直したり必要に応じて改定することを計画している。

広い意味で、共同体の結合に対する学校の貢献は以下の3つのカテゴリーに分けられる。

- ⌘ 教育、学習、カリキュラム - 生徒に、他人を理解し、共通の価値観を促進し、多様性を評価するよう教え、人権およびそれを支持、擁護する責任に対する認識を高め、参加スキルや責任ある行動を育てる。
- ⌘ 公平と美德 - 可能な限り高い潜在性を発揮できる公平な機会をすべての人に確保し、学習や他の活動を利用したり参加する上で障壁を取り除き、異なるグループによる結果の差異をなくす。
- ⌘ 連携と方針 - 児童、若者およびその家族に対して、異なる背景の人々と交流する機会を提供し、地元の、英国の、あるいは世界の異なる学校や共同体との結合を含め、積極的な関係を築く。

### 3.2 共同体の結合に関して何を考慮すべきか？

校内ですでに行われている活動の内容や、他校と協力して行える可能性のある活動について考慮する必要がある。

さらに、学校は、共同体の結合をサポートする努力や活動の一部も、「積極的に貢献する」、「楽しみながら達成する」、「経済的福祉を達成する」という「どの子供も大切」政策の結果に貢献できる点を踏まえ、福祉を促進する義務を検討したいと願っている。

#### 教育、学習、カリキュラム

効果的な学校には、高い水準の学習を支え、共通の価値観を促進し、生徒が取り囲む多様性を理解し、類似点を認識し、異なる文化、信仰、民族および社会経済的背景を認めるよう助けるための高いレベルの教育およびカリキュラムがある。

同一性や多様性の問題を討議する機会をカリキュラム全体に組み込む。

我々は以下の点を確実に実施する必要がある。

- ⌘ 共通の価値観を促進し、違いを認めて偏見や固定観念を克服するよう生徒を助けるための授業をカリキュラム全体に取り入れる（市民権の授業で生徒たちが同一性や多様性の問題や「英国で仲良く暮らす」ことが何を意味するかを話し合う機会を設ける）。
- ⌘ 様々な共同体を訪問し、人々と会うことにより共同体と多様性に対する生徒の理解を深める、といったプログラムをカリキュラムに組み込む。
- ⌘ 英語が母国語ではない(EAL)生徒が英語で達成可能な最も高い学習レベルに到達できるようサポートする。
- ⌘ 学校、地域社会およびそれより大きな単位の中で活動に参加し、貢献することを教えるため、生徒の意見に耳を傾け、生徒会や組織に参加させる。

#### 公平と美德

我々は、あらゆる民族的背景および異なる社会経済的立場にある全生徒が高い水準で学業を達成し、生徒たちの潜在力が十分に引き出されるよう敬意を持って扱われ、サポートを受けられるようにすることを引き続き重視すべきである。

学校追跡システムは、様々なグループの進歩を評価し、特定グループの成績不振を解消するのに役立つ。

偏見、いじめ、いやがらせ事件を監視する努力を一層強化する必要がある。

特定のグループの生徒が他の生徒より退学や懲罰の対象になる傾向があるか否かを監視し、この問題を克服するために適切な行状、懲罰方針を実施する必要がある。

当校の入学基準は、入学手順の中で共同体の結び付きや社会的公平性を促進することの重要性を強調している。

#### 連携と方針

学校間：我々は地元もしくは遠方に目を向け、他校との連携を広げるよう努力すべきである。交換訪問や、



より現実的な方法としてインターネットを通して他校との関係を築くことができる。

施設を共同使用することにより、スポーツや演劇など意義深い異文化活動の機会が生じるため、それも生徒の交流のための手段と言える。

学校と両親、共同社会：地元およびより広範な共同社会との良好なパートナーシップ活動には以下が含まれるかもしれない。

- ✕ 個人指導計画や、共同社会の代表者を生徒と共に活動するよう招待するなど、共同社会の代表者と共に活動する。その際には生徒の意見を聞き、必要な調整を行うようにする。
- ✕ 学校と、青年サポートサービス、警察や社会医療および健康専門家などの他の地元機関との間の強力な絆や多機関連携を保つ。
- ✕ コーヒーモーニング(coffee mornings)、カリキュラムイブニング(curriculum evenings)、親子コースおよび家族連絡活動を通して両親と連携する。
- ✕ 拡大サービスを提供し、特に、しつけやファミリー・サポートを通して、さらに、大人および家族学習、ICT、並びに英語を母語としない人のための英語課程(ESOL)の授業など、学校時間外に行う活動のために学校施設を共同体に開放することにより、様々な背景の両親が交流できるようにする。

関連ウェブサイト

[www.everychildmatters.gov.uk/ete/extendedschools](http://www.everychildmatters.gov.uk/ete/extendedschools)

[www.teachernet.gov.uk/extendedschools](http://www.teachernet.gov.uk/extendedschools)



エレルセントジョーンズCE小学校  
Tel: 01524-751320 Fax: 01524-751917  
校長：C.トーマス先生



## ヘッドライン・ニュース

正義

「キリストの観点から愛し、生き、学ぶ」

第2号—2012年9月28日（金）

当校の最新ニュースレターをご覧くださいありがとうございます。月日が流れ、天候は良くありませんが、学校のムードは明るく、積極的で、かつ活気にあふれています。両親の皆様におかれましてはアンケートにお答えいただきありがとうございます。皆様のご意見は当校にとって大切なものであり、私達職員は皆様が改善を望んでおられる分野を特定し、十分に分析してから皆様に再度ご報告いたします。

先週の金曜日の晩に行われた「雨の日クイズ」にご参加頂いた皆様には心から感謝いたします。参加者全員大いに楽しむことができました。教師はクイズに勝てず、ほぼ毎回、クイズマスターの称号を誰が手にするかが問われました。イベントを計画し賞品を準備してくださった両親の皆様ならびにおいしい食事を提供してくださったザ・ストークのスタッフにも感謝いたします。その一晩で 425 ポンドもの大金が学校基金として集まり、一年のすばらしいスタートを切ることができました。

### エコ議会

エコ議員には長期プロジェクト実施のため 2 年間の任期が与えられます。今年も幾人かの新たなメンバーが元のメンバーに加わりました。議会のメンバーは以下のとおりです。

**ブナノキ**：イソベル・モーガン、エオイン・ドッド

**ヒイラギ**：ラリ・アサートン、ジェームズ・モロイ

**ハシバミ**：イヴ・カルビー、アリステル・フィッシャー、ダニエル・マラ

**スズカケ**：ルイス・ベッド、アレクサンダー・パートラム、ハッチ・フラッサー・グレイ

**オーク**：トーマス・アンダーソン、メイリ・フィッシャー、カレイシャ・バラ・アンソニー

### 学校議会

クラスの代表として学校議会に当選した児童の皆さん、おめでとう。

**ブナノキ**：ローレンス・ベッド、エマ・ガードナー

**ヒイラギ**：カラム・タイソン、メーバン・フェアブラザー・ケリング

**ハシバミ**：コナル・ドッド、バリ・ウジボン、アヤット・アラグラホリ

**スズカケ**：アシャ・クラーク、ルーク・クラーク

**オーク**：トーマス・アサートン、ハンナ・トリムネル、ジェシカ・アシュクロフト

**無料の学校給食**：無料の学校給食を受ける資格がある場合、申し出る気持ちがなくても学校事務所に登録することは大切です。政府は無料の学校給食の登録数などを尺度として学校への資金投資を拡大することを目指しています。この点で相談もしくは援助が必要な方は、事務所で尋ねてください。

**校内での援助**：当校のために時間を割くことができなくなる方は、事務所で名前をお知らせください。朗読のチェック、図画工作活動または運動クラブの指導や監督の分野で協力したいと思われるかもしれません。どうぞその旨お知らせください。

### 正義と公正取引

当校が今期に重点を置いている価値観は正義です。この一環として、当校は公正取引および当校が学校としてどのように関わりを持てるかについて考えています。これは、来年一年間公正取引村となることを誓うゴルゲート村の努力と一致します。10月15～19日の週に、当校はこの問題について児童とともに考える一連のイベントや活動を執り行いますが、その一つは公正取引コーヒーアフタヌーンです。このイベントは以下の日時に行われます。

**10月18日（木）2:30 pm～**

手帳に日付をチェックのこと。詳細は後ほどお知らせします。

### 今後の予定

10/1(月) 父兄のためのロビンウッドミーティング

6年生 6:00 pm

10/2(火) 生徒とガキキュラムミーティング 3:30 pm

10/4(木) 人事、会計ミーティング 6:00 pm

10/8(月) レセプション父兄朗読ミーティング

6:30 pm

10/10-12 ロビンウッドトリップ 6年生

10/15-19 ひとつの世界週間

10/17(水) 父兄との親睦の夕べ

10/19(金) 収穫の祭りの礼拝

9:30 セントジョーンズ教会

